

平成二十五年度秋季企画展

長尾景春と鉢形城



鉢形城歴史館

平成25年10月5日(土)～11月24日(日)

尾氏の勢力を飛躍的に伸張させた人物です。文安5年(1448)に景仲は家宰に就任し、名実ともに長尾氏一族の最有力者となりました。その後、寛正2年(1461)ごろに景仲は子である景信に家宰を譲り、寛正4年に死去しています。

景信は、文明5年(1473)6月に死去し、嫡子である景春は家宰を継ぐことができず、景信の弟でかつて家宰であった惣社長尾忠政の養子となっていた忠景が家宰となります。ちなみに、忠景は武蔵国守護代も兼務しています。

忠景以後の家宰については諸説ありますが、上杉顕定の書状等の状況から足利長尾氏の景長が就任したと思われる。足利長尾氏は、享徳の乱の最中である文正元年(1466)に宗家筋にあたる鎌倉長尾氏の景人が古河公方の勢力下であった足利庄を抑えるために移り住んだことから始まります。子である景長は、永正9年(1512)の上杉顕定没後の後継争いにおいて、憲房を支持して、鉢形城に在城する関東管領顕実(古河公方成氏の実子で、顕定の養子)を追放しました。景長は憲房を関東管領に据えることで、確固たる地位を築きます。

大永8年(1528)に景長が没すると、その子憲長、当長(のちに景長と改名)へと家宰は継承されますが、後北条氏の圧力に耐えかねた関東管領上杉憲政が越後国の長尾景虎のもとに身を寄せるに至り、家宰が消滅したと思われる。なお、当長は景虎に服属することとなり、永禄5年(1562)景虎が攻め落とした館林城に入城し、以後館林長尾氏となります。

3. 景春までの白井長尾氏

(1) 景仲

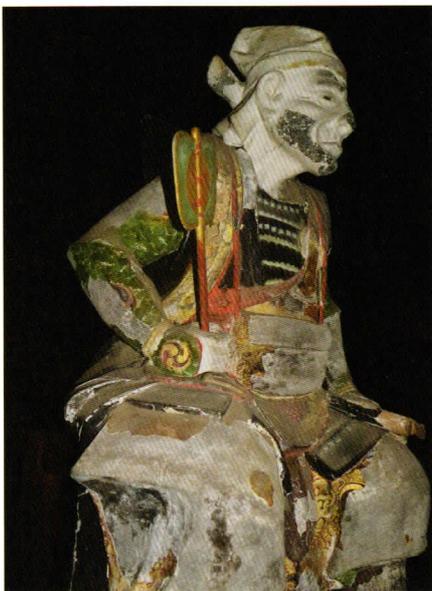
白井長尾氏は、景忠の子である清景が上野国白井(渋川市)を拠点としたのが始まりとされ、その子景守に実子がいなかったために、鎌倉長尾氏から景仲を養子にして、家督を継がせました。これは、景仲の母親が白井長尾氏の出身であったためでした。

景仲が活躍し始める永享10年(1438)に、室町幕府第6代将軍足利義教と鎌倉公方足利持氏の武力衝突が発生しました(永享の乱)。景仲の主家となる関東管領上杉憲実は、幕府側として持氏を滅亡させ、関東管領が鎌倉府を主導する立場となります。景仲は、家宰長尾忠政らとともに活躍し、永享12年には武蔵国守護代となり、山内上杉氏家宰の次の地位にのぼったとされています。

その後、結城合戦等鎌倉公方側の叛乱が相次いだことから、幕府側は打開策として持氏の遺児成氏を鎌倉公方としました。同時に上杉憲実は関東管領を引退し、景仲は憲実の子である憲忠を後任に就かせ

ることに成功し、その影響力を増大させます。文安5年景仲は家宰となり、長尾氏一族の最有力者となり、主家山内上杉氏を主導する存在となり、扇谷上杉氏の家宰である太田道真(道灌の父)と並び、「東国不双の案者」と呼ばれました。

両上杉氏と鎌倉公方との対立は解消されることなく、宝徳2年(1450)の「江の島合戦」では、鎌倉公方成氏が勝利したことから、景仲は家宰を解かれています。さらに、享徳3年(1454)成氏が関東管領上杉憲忠、家宰長尾憲景父子を鎌倉西御門邸宅にて殺害したことから、両者の対立は決定的となりました。これ以後の関東をほぼ東西に二分する両上杉氏と足利成氏(のちに本拠を下総国古河に移したことから「古河公方」と称されます)側との争いを「享徳の乱」といい、その後28年間続きました。再度家宰に就任した景仲は、寛正2年ごろには子



長尾昌賢(景仲)像(雙林寺)



雙林寺山門(渋川市)

江戸時代には上野国・信濃国・越後国・佐渡国の曹洞宗僧録所寺院を支配する寺院であった。

景信に家宰を譲つたものと思われ、同4年に鎌倉で死去したといわれています。

(2) 景信

景仲の後継者である景信は応永20年(1413)に生まれたと伝えられています。古河公方成氏と五十子陣(本庄市)で対陣中、関東管領山内上杉房顕が没し、越後国守護上杉房定の子である顕定を関東管領に就任させることに尽力し、その威勢を保ちます。父景仲や子である景春とともに上杉方の主力として活躍し、文明3年(1471)6月には古河城を攻め、成氏を千葉氏のもとに逃れさせるといった軍功をあげています。翌年成氏は結城氏の後援で、古河を奪還しますが、景信はその騒乱の中間5年に死去し、景春が家督を継ぐこととなりました。

景信は、軍功だけの人でなく、連歌師宗祇らを五十子陣中に招くなど、文武両道の人だったようです。享徳の乱の真最中、関東管領上杉房顕の死去と顕定の家督継承、対古河公方戦略など重要な局面に対処していった景信の器量は大きい評価されるべきでしょう。

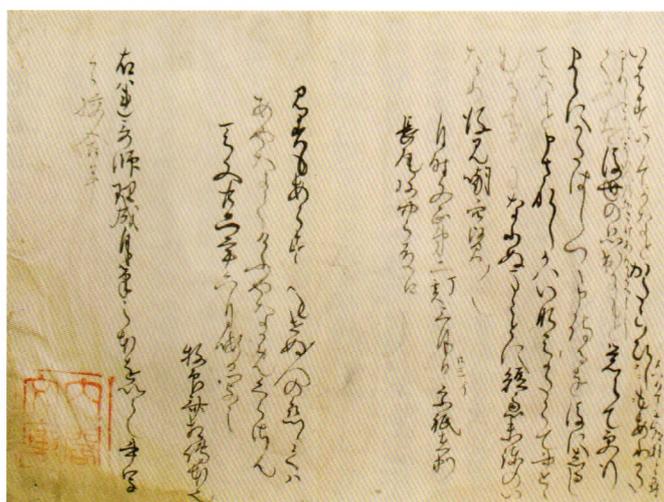


雙林寺記 (別名: 御影之記)

(3) 景春

景春は景信の嫡子として嘉吉3年(1443)に生まれ、母は越後国府中長尾頼景の娘と言われています。景春に関する初見の史料は、文正2年(1467)に連歌師宗祇が「吾妻問答」と呼ばれる連歌論書の写しを「長尾孫四郎殿」へ与えたとの奥書になります。そのころ、景春は父景信とともに五十子陣に滞在しており、文明3年の下野国侵攻に役買つています。

父景信死去後、白井長尾氏の家督を継承した景春は、当然山内上杉氏家宰も継承するものと思いましたが、上杉顕定はそれを認めず、景春の叔父にあり、武蔵国守護代であった惣社長尾忠景を任命します。これは、年若であった顕定の一存ではなく、宿老寺尾入道や海野佐渡守との協議の結果で、忠景が山内



吾妻問答
最後に「長尾孫四郎」とある

上杉氏家中の長老的な存在であり、白井長尾氏の前家宰は、惣社長尾氏であったことからすると、一般的には妥当と思われました。

しかし、景春はこの処遇に対し強く反発したのでした。

4. 長尾景春の乱

(1) 背景と乱までの経緯

長尾景春の乱の経緯については「太田道灌状」が詳細に伝えています。

そもそも家宰は、上杉氏の家政と家務を取り仕切ることから、様々な権益を有し、白井長尾氏の被官(家人)・傍輩(同輩)らはその利害関係にあります。そのため景春が家宰になれないことは彼らにとっても死活問題でした。景春に同調するものは武蔵国・上野国・相模国の中の忠景に対して不満を抱いている被官・傍輩で、その数は2,3千人にも及びました(「松陰私語」)。

文明6年(1476)景春は、一党とともに上杉顕定らが滞陣する五十子陣への通路を封鎖したため、上杉方は騒然となりました。その状況を打開するため、扇谷上杉氏の家宰であった太田道灌が呼び出され、五十子陣に参陣することとなりました。

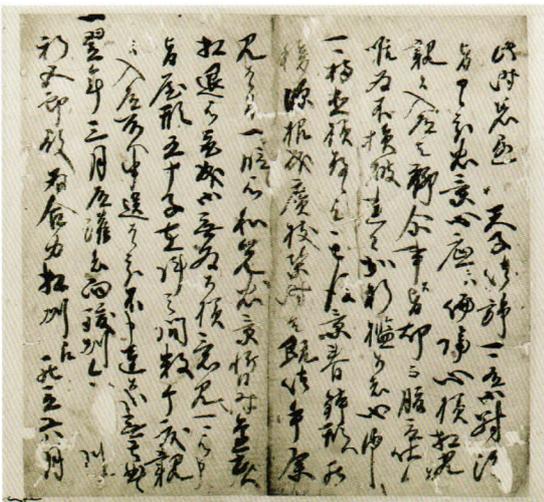
ちなみに、道灌は景春からすると父景信の妹の夫、つまり叔父にあたります。景春は、使者を派遣し、道灌の出陣を思いとどませようとしたのですが、道灌はそのまま進軍を続けました。扇谷上杉氏の宿老上田上野介が宿営していた小河(比企郡小川町)に道灌が着陣すると、飯塚(寄居町桜沢付近)陣から景

春自ら訪れ、顕定とその実兄である越後国守護上杉定昌を討ち取る計画を打ち明け、その計画に支障をきたすから参陣しないよう要請しました。道灌はその要請を断り、五十子に着陣し、謀反の計画を顕定らに報告しましたが、顕定からはなんの音沙汰もありませんでした。

文明8年(1478)3月に道灌が駿河国今川氏の内乱鎮圧に出陣したことを契機として、景春は鉢形城を拠点として叛乱をおこします。道灌は、「其の後景春鉢形へ罷り移り深く根を成し枝葉を広げ候時は既に御手余りと見え候間」と容易ならざる状況を憂えています。

(2) 乱の経緯 (鉢形城居城のころ)

文明9年正月、景春が五十子陣を襲撃すると、顕定・扇谷上杉定正、長尾忠景らは上野国に退去し、武・上・相の三国の景春党も各地で蜂起しました。道灌は、まず在城する江戸城と河越城を分断する



太田道灌状部分(國學院大學図書館蔵)

この中で、道灌は「此の時天子の御旗を差し懸け御退治有るべき旨申し候處」と早急な処置を主家に訴えていたことが分かる。

位置にいる豊島泰経らの練馬・石神井両城の攻略を図り、4月13日に江古田原にて豊島氏方と戦い、28日にはほぼ武蔵国南部・相模国を平定しました。

5月13日、道灌は両上杉氏を五十子陣に帰陣させ、それを受けた景春は上州勢とともに五十子・梅沢(本庄市)に布陣しました。14日、道灌は鉢形城と五十子の間の次郎丸に進軍し、出撃してきた景春軍を用土原で打ち破りました。景春は、鉢形城に籠城し、両上杉方に包囲されました。

この危機的な状況に、古河公方成氏が上野国灌に出陣し、上杉方と広馬場(榛東村)で対陣することとなり、一時的に景春は命拾いをしました。やがて顕定は成氏と幕府の和睦を上杉氏が調停することを条件に和睦することとなりました。

景春党は、和睦に納得せず、各地で反乱を続けました。同10年7月上旬、太田道灌は、武蔵・相模両国の兵とともに河越城を出陣し、17日に荒川を越え鉢形城と成田陣の間に布陣しました。成氏は景春に見切りをつけたため、18日未明に道灌は景春の陣所を攻立てました。景春は落ち延びていき、成氏は古河に帰陣しました。この陣所が鉢形城を指しているかは、「道灌状」では不明ですが、鉢形城が道灌側の手に落ちたことは間違いないようです。

(3) 乱の経緯 (鉢形城落城後)

扇谷上杉定正・太田道灌らは、山内上杉顕定を上野国から武蔵国へ迎えました。顕定の在所について議論があったようですが、道灌が鉢形城を「防備と武蔵・上野両国を治めるのに適した場所」という理由で推薦したため、最終的には鉢形城に決まり、上杉方の本陣となりました。



長井城跡(熊谷市西城)

景春は長井六郎とともにここで上杉軍と戦った。

同11年9月ごろ長井六郎らとともに長井城(熊谷市か?)に移りました。景春はその後、秩父を本拠としてゲリラ戦を展開します。

同12年正月4日、景春が児玉で蜂起したところ、道灌は塚田(寄居町赤浜)に出陣し、定正は河越城から13日に沓掛(深谷市)に進軍しました。景春の飯塚陣に夜襲をかけようと協議しましたが、景春はそれに気づき、秩父に退きました。20日、景春は越生に進軍しましたが、龍徳寺に滞在していた太田道真に敗れて、秩父に退却しました。このころ、道灌は長井城を大石氏とともに攻め、攻略しました。このような状況から顕定は、景春の秩父の拠点である日野城(秩父市)攻略のため、鉢形城を出陣し、大森(秩父市か?)に布陣しました。

すると、上杉方に協力的であった古河公方成氏は



日野城跡(秩父市荒川日野)
景春は高佐須城落城後ここで籠城したといわれている。

態度を豹変させ、景春支援の動きを見せ始めました。これは、幕府との和睦交渉を上杉氏が取り組まないことに業を煮やし、代わりに景春が遂行することを約束したためといわれています。

さらに、道灌は6月13日秩父に参陣し、顕定の命を受け、24日に日野城を落城させ、景春は成氏のもとに逃れたといわれています。ここに足かけ4年にわたる「長尾景春の乱」がようやく終結しました。

(4) 意義

長尾景春の乱は、当初「山内屋裏之義」といわれたように山内氏内部の抗争という面がありました。太田道灌状にもあるように単なる叛逆でなく天子の「錦の御旗」を掲げて追討するような、大きな争乱

と道灌はとらえていたようです。特に神社はいままでのように、所領に命令が行き届かなくなり、国衆などの有力在地領主に横領され、いわゆる「中世的世界の秩序」は崩壊し、実力による支配に変化していきます。それは、城を中心とした領地支配を乱立させ、集合離散を経ながら群雄割拠の様相を呈していきます。まさに戦国時代の到来です。景春の乱は、関東の戦国時代幕開けを告げる大事件であり、それに敏感に反応していたのが、景春党と乱を掃討した道灌自身であつたのではないのでしょうか？

道灌は上杉氏を守る旧体制派でしたが、皮肉にも守ろうとした主家により非業の死を遂げてしまいました。

景春の乱が成功していれば、越後国の長尾為景(景虎のちの上杉謙信の父)や伊勢宗瑞(北条早雲)のように戦国大名へ成長したと思われれます。

5. 乱後の景春

道灌の死後、両上杉氏は敵対することとなり、それを長享の大乱(1487~1505)と呼びます。景春は乱終息後、古河公方のもとに逃れ、都鄙の和睦に尽力していたと思われれます。

長享2年(1488)6月須賀谷原合戦(嵐山町)・11月高見原合戦(小川町)では扇谷上杉定正軍が顕定軍に勝利しますが、景春は定正に味方して参戦し、定正からは殊勲第一と称されるほどの武功をあげました。須賀谷原合戦では、景春は山内上杉側として参戦していた地元の豪族藤田氏と戦い、「然而長尾左衛門入道藤田ノ手ニ撃勝」と勝利しています。

このころ、景春は出家し「伊玄」と名乗りました。

明応3年(1494)10月5日、高見原の戦いで定正が荒川渡河の折に落馬し、その傷が原因で急死しました。そのため、古河公方成氏・政氏親子は山内側に転じましたが、景春は、山内氏に従属することをよしとせず、扇谷側の立場を堅持しました。

扇谷氏の勢力が目に見えて衰えていく中、永正2年(1505)3月河越城の朝良(定正の養子)は包囲していた顕定に降伏し、一連の争乱はここに終焉しました。ここで、景春は山内上杉氏に帰属したようです。

永正4年、越後国守護上杉房能(顕定の弟)が越後国守護代長尾為景によって殺害されるという事件が発生しました。顕定は、為景追討のため永正6年7月に関東勢を率いて越後国に出陣すると、8月扇谷上杉氏に従っていた伊勢宗瑞が為景を支援するため、両上杉氏領国へ侵攻しました。翌年景春も為景・宗瑞に味方して、相模国津久井山に陣を張りました。顕定は、越後国で横死する直前に長尾景長に宛てた書状で、景春の行動を「不思議の次第」と驚き、「二代両度の不義」と怒りをあらわにしています。

その後景春は上野国で活動しますが、やがて没落して、同9年には宗瑞を頼り駿河国に在陣していたようで、足跡が追えるのはここまでです。雙林寺に伝わる「御影之記」では白井城在城のまま同11年8月24日に72歳で亡くなったとされ、墓所と伝わる供養塔は渋川市空恵寺に存在しています。なお、秩父にも景春の墓と伝わる石造物が法雲寺(秩父市)に存在しています。

6. 景春以後の白井長尾氏

(1) 景英

長尾景春の嫡子景英は、文明11年(1479)の生まれで、母は沼田憲義(泰輝)の姉妹と思われます。黒田基樹氏の説によると妻は足利長尾景人の娘で、後に家宰となる足利長尾景長の姉妹であったといわれています。

山内上杉氏に対し、白井・足利長尾両氏は敵対していました。明応4年(1495)頃に足利長尾氏は山内上杉氏へ帰属したようです。景英は、足利長尾景長の調停により山内側に復帰したと思われ、景春とは袂を分かち、明応5年以降は山内氏側として史料に登場します。顕定没後、関東管領職を継いだ上杉顕実(顕定の養子で成氏の子といわれている)を憲実とともに攻めています(永正の乱)。

「雙林寺伝」によると、景英は大永7年(1527)



紺糸威餓鬼胴具足(長林寺所蔵)

足利長尾氏の菩提寺である長林寺に伝わる甲冑で、長尾家の家紋である九曜巴紋が眉庇などにほどこされている。

(足利市指定文化財)

12月5日に死去し、墓所は、渋川市空恵寺とされています。また、前橋市西大室にある「めいがん様」と

呼ばれる五輪塔が景英の供養塔と伝えられ、「為明厳宗哲禅定門」と景英の戒名が刻まれています。この五輪塔は地元では景春の墓とも言い伝えられています。また、大室神社は大室城跡といわれ、景英がここで隠居し、その後城代である牧和泉守が居城したといわれています。

(2) 景誠

景春の嫡孫にあたる景誠は、永正4年(1507)の生まれで、母は長尾景人の娘といわれています。妻は箕輪城主長野業正の姉であったと思われています。景誠は、大永4年(1524)には家督を継いでいるものと思われていますが、享祿2年(1529)23歳で亡くなり、自害したとも伝わっています。

景誠には男子がいなかったようで、長野業正が調停に乗り出し、惣社長尾顕景の子憲景を当主として迎

えることとなりました。ここで景春の血統は途絶したと思われます。また、景誠の娘は業正の嫡子に嫁いでいることから、長野氏との密接な関係を築くことになりました。

(3) 景誠以降

景誠の後継者である憲景は、永正8年(1511)に惣社長尾顕景の三男として生まれました。元は景房と名乗っていましたが、後に上杉憲政から名をもらい憲景と名乗りました。長野業正の調停により、白井長尾氏を継承することとなりますが、憲政が越後国へ出奔後は、長尾景虎(上杉謙信)と連携し、反後北条・武田として活躍します。

憲景は、神流川合戦後に後北条氏側となり、天正11年(1583)に亡くなっています。憲景の後継は輝景で、上杉輝虎(謙信)の一字をもらっています。先のとおり、神流川合戦後は後北条氏に仕え、弟の烏坊丸(氏政の一字をもらい政景と名乗る、別名景広)を北条氏政のもとへ人質に出しますが、白井長尾氏家中は、輝景派と氏政派の対立が深まりました。同13年、弟である政景は小田原から帰国すると反北条派である大室城の牧氏を攻め滅ぼしてしまいます。一説では輝景を隠居させ、当主となったともいわれています。

輝景は小田原攻めの後、越後国上杉景勝(越後国上田長尾氏出身)に仕えたといわれ、のちに政景に家督を譲ったとされています。政景は、一時田中景広と名乗りますが、景勝の命により長尾に復姓します。景広は侍頭として米沢上杉氏に仕え、寛永3年(1626)に死去しました。

長尾景春年表

年月日	長尾景春の行動	年齢
嘉吉3 (1443)	●この年、長尾景春生まれる。母は越後長尾頼景の娘。	1歳
応仁元 (1467)	●長尾景春、連歌師宗祇より「吾妻問答」を書写される。仮名孫四郎を称す。	25歳
文明3 (1471)	●長尾景信・景春、足利長尾景人ら、足利成氏方の下野国赤見・榑崎城(足利市)をおとす。 ●長尾景信・景春、惣社長尾忠景ら、上野国館林城をおとす。	29歳
文明5 (1473)	●長尾景信死亡。嫡子景春が家督を継ぐ。山内上杉氏家宰には景信の弟惣社長尾忠景が就任する。	31歳
文明6 (1474)	●この年、景春、上杉顕定への反抗の姿勢を強め、五十子陣への通路を塞ぐ。	32歳
文明7 (1475)	●この年、景春、五十子陣に向かう太田道灌に参陣無用の旨を伝えるも、道灌出陣する。 ●道灌、途中の上田上野介在陣の小川(比企郡)に着陣。景春飯塚(寄居町桜沢)から出向き参陣中止を要請。	33歳
文明8 (1476)	●太田道灌、今川家の家督相続争い介入のため、江戸から出陣。 ●景春、五十子陣から鉢形城に移る。	34歳
文明9 (1477)	●景春、五十子陣を攻め、上杉顕定・上杉定正らは上野へ退く。 ●太田道灌、豊島勘解由左衛門尉の石神井城を攻略。 ●景春、武蔵国用土原(寄居町用土)に太田道灌、長尾忠景らと戦い敗れ、富田(寄居町富田)へ逃げる。 ●足利成氏、自ら兵を率いて上野国瀧(高崎市)に出陣、景春を援ける。	35歳
文明10 (1478)	●上杉氏と足利成氏は和睦する。 ●太田道灌、荒川を越え鉢形と成田(熊谷市)の間に陣を張る。 ●太田道灌、足利成氏の要請により景春の陣所を攻め、後退させる。鉢形城落城する。	36歳
文明11 (1479)	●太田道灌、景春方の長井城攻略のため、江戸城を出陣し、翌日に久下(熊谷市)に布陣。	37歳
文明12 (1480)	●景春、武蔵国児玉で蜂起する。 ●景春、越生へ出陣、太田道真に敗れ、秩父郡に後退する。道灌、大石氏とともに長井城を攻略。 ●上杉顕定、景春の拠点である日野城を攻略するために鉢形城を出陣し、大森に着陣する。 ●足利成氏、景春を上杉長棟の名代とし、都鄙和睦の斡旋を細川政元に頼む。同日、景春、和睦の儀につき、政元への披露を小笠原備後守に依頼する。 ●景春の高佐須城(塩沢城)、大串弥次郎の寝返りにより落城する。 ●景春、太田道灌により籠城する秩父日野城を攻略され、秩父から没落する。	38歳
文明18 (1486)	●太田道灌、相模糟屋の上杉定正館にて殺害される。	44歳
長享2 (1488)	●扇谷上杉定正、山内上杉顕定と武蔵国勝原で合戦、勝利する。景春は定正に味方し、定正より殊勲第一と称される。景春は左衛門入道・法名伊玄を称する。 ●両上杉氏は武蔵国高見原(小川町)に戦う。扇谷上杉定正は景春と大森氏頼の助けをうけ、勝利する。	46歳
明応5 (1496)	●景春、扇谷上杉氏方として伊豆国伊勢宗瑞の弟弥次郎とともに、相模国において山内上杉方白井長尾景英らの陣城を攻撃、景英らの迎撃にあい敗北する。	54歳
永正7 (1510)	●長尾景春は上杉顕定から離反して、長尾為景・伊勢宗瑞に味方し、相模国津久井山に移る。	68歳
永正8 (1511)	●この年、景春は甲斐国内から武蔵国に進軍する。	69歳
永正9 (1512)	●景春、駿河国に在陣する。	70歳
永正11 (1514)	●景春死去。	72歳

「長尾景春と秩父」

秩父地方には長尾景春に関する伝承が数多く残っています。例えば日野城と推定される熊倉城周辺の贄川地区の熊野神社には「御殿ざさら」なる獅子舞が伝わっていますが、熊倉城主長尾景春のお召しにより城中御殿にて舞ったことが由来とされます。また、小鹿野町塩沢城は「道灌状」の高佐須城と推定されていますが、城の裏手(南側)の麓にある小谷は、夜討沢と呼ばれ、鳴村近江守と小沢左近らが夜中に攻め上り、景春が落ちて行ったと伝わっています。このような伝承から、古くから長尾氏の所領があったと思われる、小鹿野町薄地区の御霊神社は長尾氏が勧進したと伝わっています。

展示資料

「長尾氏位牌」「御影之記」「平姓長尾正統系図」／雙林寺蔵
「雙林寺伝」「吾妻問答」奥書写(須美田河)「松陰私語」(続群書類従)「足利成氏書状写」(小山氏文書)「上杉定正書状写」(古證文)「大森氏頼書状写・上杉憲房書状写」(武家事紀)「上杉顕定書状写」(松平義行所蔵文書)／国立公文書館蔵
「上杉顕定書状」(赤堀文書)「足利成氏書状」(安保文書)「鳥山政長書状写(報恩寺年譜)」(小室家文書)／埼玉県立文書館蔵
「紺糸威餓鬼胴具足」(長林寺本長尾系図)／長林寺蔵
「足利成氏書状(複写)」(別府文書)／個人蔵
「木造太田道灌像(複製)」／川越市博物館蔵
「太田道灌状」／國學院大學図書館蔵
「太田道灌軍配(複製)」／埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵
「秩父志」／秩父市教育委員会蔵
三嶋神社鰐口／三嶋神社蔵
「長尾景長(当長)證状」「長尾顕長判物」(北爪文書)／鉢形城歴史館蔵

主な参考文献

黒田基樹編『長尾景春』2010 戎光祥出版
黒田基樹著『図説太田道灌』2009 戎光祥出版
『子持村誌』1987
勝守すみ『長尾氏の研究』1978 名著出版
荒川村郷土研究会『長尾景春と熊倉城』1982 荒川村
長尾景春の伝承地を歩く会編『関東・秩父地域 長尾景春の伝承の地を歩いて』2012 荒川歴史民俗資料館

資料提供者・協力者(五十音順・敬称略)

足利市教育委員会・足利市民文化財団・川越市立博物館・國學院大學図書館・国立公文書館・埼玉県立文書館・埼玉県立歴史と民俗の博物館・西敬寺・雙林寺・秩父市教育委員会・長林寺・長尾景春の伝承地を歩く会・三嶋神社

「長尾景春と鉢形城」

平成25年10月5日発行 発行：鉢形城歴史館
〒369-1224 埼玉県大里郡寄居町大字鉢形2496-2
TEL.048-586-0315 FAX.048-589-0818